

I 研究主題

個別の教育支援計画と個別の指導計画を活用した知的障がい教育における授業づくり
～豊かなスポーツライフにつなげる体育指導の実践を通して～

II 主題設定の理由

2018年3月に策定された障害者基本計画(第4次)では、障がいのある方が生涯を通じて教育やスポーツ、文化等の様々な機会に親しむための施策を推進するとともに、共生社会の実現を目指している。また、小・中学校、高等部特別支援学校学習指導要領(平成29、30年告示)において、学校教育段階から将来を見据えた教育活動の充実を図るという観点から、新たに生涯学習への意欲の向上や、生涯を通じてスポーツや文化芸術活動に親しみ、豊かな生活を営むことができるよう配慮することが求められている。

そのため、特別支援教育においては、長期的な視点で幼児期から学校卒業後までを通じた切れ目のない支援を行うための個別の教育支援計画を作成し、活用することが重要となる。また、特別支援学校学習指導要領では、個別の教育支援計画と個別の指導計画との関係について、作成する目的等に留意しつつ相互の関連性を図り、学習を展開することが求められている。

しかし、先行研究によると、藤井ら(2017年)は、個別の指導計画で作成した指導目標と授業内容が十分に関連されていないことを指摘し、窪田ら(2016年)は、これらの計画と授業との活用において「効率的な打合せ」が重要であると述べている。また、佐々木ら(2016年)は、個別の指導計画の活用について、「活用のための実質的手立てとそのプロセスはこれまで担当教師の任意に委ねられ、その手立ても非公式・非定型であり、不透明さがある。」と指摘している。さらに、木ら(2010年)によると、特別支援学校では、前年度の目標や評価の背景、根拠が把握できずに次の目標の方向性が見えないために前年度を踏襲した指導に陥りやすいことを述べている。

そこで、本研究では、将来を見据えた教育活動の充実を図る観点から、個別の教育支援計画と個別の指導計画が活用された授業づくりについて研究を深めていく。授業の計画段階から、個別の教育支援計画等に記載されている目標や内容を盛り込み検討していく。その検討の場として、授業の打合せをすすめる既存の教科会を用いる。また、障害者基本計画(第4次)では、東京2020オリンピック・パラリンピックを共生社会へ向けたの一つの契機として捉えており、障がいの者のスポーツの裾野の拡大に向けた取組を推進していることや、みやざき特別支援教育推進プラン改訂版(宮崎県教育委員会:2018年)において、スポーツ等を通じて「生きがいづくり」を在学中から計画的に取り組み必要性が示されていることから、体育指導での実践を通して検証を行う。

本研究を通して、将来を見据えた授業が展開されるための個別の教育支援計画等の活用の方や授業実施までのモデルとなる教科会の在り方を提示することができ、みやざき特別支援教育推進プランの実現にもつながると考え、本主題を設定した。

III 研究目標

個別の教育支援計画と個別の指導計画を活用した知的障がい教育における授業づくりの在り方を明らかにする。

IV 研究仮説

個別の教育支援計画及び個別の指導計画と体育の授業づくりが関連した教科会の在り方を明確にすることで、個別の教育支援計画と個別の指導計画が活用された授業づくりができるのではないか。

生涯学習の充実

障害者基本計画(第4次)・学習指導要領・みやざき特別支援教育推進プラン

個別の教育支援計画と個別の指導計画が活用された授業づくり

研究主題

個別の教育支援計画と個別の指導計画を活用した知的障がい教育における授業づくり

研究目標

個別の教育支援計画と個別の指導計画を活用した知的障がい教育における授業づくりの在り方を明らかにする

研究仮説

個別の教育支援計画及び個別の指導計画と体育の授業づくりが関連した教科会の在り方を明確にすることで、個別の教育支援計画と個別の指導計画が活用された授業づくりができるのではないかと

検証

教科会

・ 個別の教育支援計画と個別の指導計画の活用
・ 教科会の活性化

授業

・ 生徒の将来像から設定された単元内容
・ 個に応じた指導

検証1(実践)と検証2(長距離走)を実施

VI 理論研究

1 知的障がい教育における個別の教育支援計画と個別の指導計画を活用した授業づくり

(1) 個別の教育支援計画と個別の指導計画の意義

「個別の教育支援計画」は、障がいのある幼児児童生徒を生涯にわたって支援する視点から、教育、医療、福祉等の関係機関の関係者及び保護者等が幼児児童生徒の障がいの状態等に関する情報を共有化し、一人一人のニーズを把握して、教育的支援の目標や内容、関係者の役割分担などについて計画するものである。「個別の指導計画」は、一人一人の児童生徒に對して効果的な指導を行うために教育課程を具現化したものであり、教科や領域ごとに具体的な指導目標、内容・方法を示したものである。

平成29年に告示された小学校、中学校の学習指導要領では、特別支援学級に在籍する児童生徒、通級による指導を受ける児童生徒についての個別の教育支援計画及び個別の指導計画(以下、個別の教育支援計画等)の作成が義務付けられ、効果的に活用することが示された。また、高等学校においても、通級による指導を受ける生徒に同様の記述が示された。インク

ループシブ教育システムの構築が進む中、個別的教育支援計画等の果たす役割は、今後ますます重要になることを示唆している。

(2) 個別的教育支援計画等の活用

障害者基本計画(第4次)の「9. 教育の振興」の中で、障がいのある幼児児童生徒の自立と社会参加に向けて主体的な取組を支援するという視点に立ち、すべての学校において個別的教育支援計画等を活用して、適切な指導や必要な支援を受けられるようにすることが明示されている。

家庭(2017年)は、計画を作成する上で、目の前の課題解決だけでなく、児童生徒及び保護者の願いや将来の希望を踏まえて作成すること、さらに、個別的教育支援計画等の意義を理解し、教員間の連携ツールとして活用することの大切さを示している。

しかし、窪田ら(2016年)が行った調査の結果、「個別教育計画で作成した指導目標と授業の目標が関連していない」等の現状があり、「日々の授業の中に個別教育計画を関連付け、授業を通して見直し修正していく仕組みを一層強化していくこと」を課題として示した。また、国立特別支援教育総合研究所における研究(2018年)において、特別支援学校(知的障がい)では、個別の指導計画を引継ぎとして活用しているものの、次年度の指導計画の立案の中には指導目標等を参考にしている学校は少ないことを明らかにしている。

このように、国は個別的教育支援計画等の活用を求めている一方、先行研究から共通理解や授業改善への十分な活用にまで至っていないなどの課題点が指摘されている。

(3) 個別的教育支援計画等を活用した教科会

特別支援学校の授業の多くは、ティーム・ラーニング(以下、T・T)により展開されている。また、研究協力校における教科別の指導「体育」の時間については、学年での合同学習や同じ教育課程内の全学年合同での学習が実施されている。生徒の人数が増えることで、指導・支援に必要な教師の数も増える現状がある。

T・Tの効果を高めるためにも、授業づくりの各段階(授業計画の立案、必要な教材・教具の準備、指導の実施、評価と反省)から教師が協働で進め、授業や児童生徒の実態を共通理解しておくことは大切であると示している(静岡県総合教育センター)。

福山(2017年)によると、知的障がいのある児童生徒を教育する特別支援学校におけるT・Tの課題として、「共通理解の困難性」を指摘しており、その原因として、「共通理解のための時間がとりにくい」ことを挙げている。

限られた時間で十分な共通理解を目指すため、【表1】に示す、各県教育センターや各学校における授業研究の進め方等を参考にしながら教科会の充実を図っていきたい。

【表1 各県教育センターや各学校における授業研究の進め方等】

<ul style="list-style-type: none"> ・フアンシテーション ・図で示す ・効率的で効果的、継続的な会であること 	<ul style="list-style-type: none"> ・進め方や視点の共有 ・ゴールの確認 ・場のデザイン ・結論を一つと決めない
<p>【具体的方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外部講師を招聘 ・黒板やホワイトボードの活用 ・フリーカード ・5WI1H 	<ul style="list-style-type: none"> ・付箋を活用 ・小グループ編成 ・カード構造法 ・マトリクス法 ・VTRの活用 ・アイズブレイク ・ブレインストーミング ・ブレインライティング ・ロジックツリー ・KJ法
<p>【情報共有の方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・廊下へ掲示 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネットの掲示板機能の活用

2 個別的教育支援計画等と豊かなスポーツライフとの関連性

豊かなスポーツライフを実現するためには、運動そのものに興味をもったり、体育学習の楽しさを感じたりすることが必要である。

そのために、個別の指導計画を用いて、一人一人の学びを確かなものにし、個に応じた「わかる」「できる」「かかわる」ことができる学習を展開することが大切となる。さらに、運動を「する」ことだけの視点で捉えるのではなく、「みる」「支える」「知る」などの活動を通して、スポーツとの多様な関わり方を指導していくことは、全ての児童生徒が運動に関わるきっかけとなることで期待される。また、個別的教育支援計画には、生徒や保護者の思いや願いなどの生きがいづくりにつながる項目が記載されている。これらのことから、個別的教育支援計画等の内容が、豊かなスポーツライフにつながる学習を計画する上で、関連性のある情報になる。

そこで、本研究では、個別的教育支援計画等を活用した授業づくりが、生涯学習への意欲の向上やスポーツとの多様な関わり方、運動の楽しさに触れることなどの体育学習の充実や豊かなスポーツライフにつながるものと捉えた。

Ⅶ 実践研究

1 本県の現状

宮崎県内の知的障がいのある児童生徒を教育する特別支援学校9校(25学部)を対象として、7月にアンケート調査を実施した。アンケート結果では、体育の単元を計画する際に活用しているものとして、「昨年度の計画」、「学習指導要領及び解説」、「関係者の意見」の合計が約80%であり、個別的教育支援計画の活用は2%、個別の指導計画の活用は12%であった。また、23の学部(92%)で教科会(体育授業に関する話し合い)が設定されていた。情報共有の在り方の自由記述での回答では、会で使用した資料や会議録、口頭での説明が多く挙げられ、校内支援システムのチャットメールの利用も見られた。

2 個別的教育支援計画等を活用した授業づくりの実施

授業づくりは、研究協力校である都城きりしま支援学校中学校部第2学年(生徒数18名:通常学級16名、重複障がい学級2名)の教科別の指導における体育の時間で実施した。教科会で授業の計画と検討を行い、それを基に検証授業を行った。

(1) 検証1


ア 教科会の実践

理論研究とアンケート結果を踏まえ、教科会を活用した。今回、体育で身に付けさせたい力、学習指導要領の確認等と個別的教育支援計画等を活用した授業計画の2回の教科会を実施した。

(7) 教科会の概要

目的	本人及び保護者の思いや願い、体育で身に付けさせたい力の共通理解を図る。個別的教育支援計画等を活用して単元を計画する。
実施日時	7月24日と25日の各50分間で実施
参加者	都城きりしま支援学校中学校部保健体育免許保有者の5名
準備物	個別的教育支援計画、個別の指導計画、付箋紙、学習指導要領解説等
研究員の立場	意見が出やすく共有されるようにファシリテーターとして参加

(イ) 教科会の活動の様子と支援の手立て

<p>活動の様子</p> 	<p>支援の手立て等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個別の教育支援計画と個別の指導計画をすぐに確認できるように準備した。 ・個別の教育支援計画で生徒や保護者の思いや願い、個別の指導計画の各教科等の課題や手立てを共通理解した。 ・全員が納得できるように、合意形成を促すアジャシリテーションを取り入れた。 ・意見を出しやすくなるために、テーブルのスペースをなくした場の工夫、付箋紙を用いて個人での思考する場面を設けた。 ・意見のズレをなくすために、本会のゴール（目標）を掲示した。 ・考えや議論を視覚化するために、ホワイトボードや模造紙を利用した。教科会に参加していない教師との共通理解を目的に、職員室に掲示をした。（左の写真参照） ・意見を出しやすく、また、整理しやすくするために、ブレインストーミング、KJ法、5W1H法を活用した。
---	---

(ウ) 個別の教育支援計画等を活用した単元設定

右の【図1】は教科会の意見を基に作成した単元設定へのイメージ図である。前年度の計画の踏襲ではなく、これまでの視点に生徒や保護者の思いや願いを踏まえ、単元を設定した。

【図1】 検証授業Ⅰにおける単元設定へのイメージ図

(エ) 実態に応じたルール設定

「投げる」「捕る」の技能について、個別の指導計画等を用いながら、話し合った。【表2】のように、ボールを捕る意識を高めるために、生徒の実態に応じて捕る段階別に得点が与えられる設定をした。

グループ	捕るルール（厳格な判断は審判が行う）
I	・フリースタウンドで捕る。 ・動きながらある程度強いボールをフリースタウンドで捕る。 ・フリースタウンドのボールを捕る。速いバウンドボールを捕る。 ・ボールを手や足で止める。 ・ボールを捕りに行き、さわる。 ・ボールを目で追い、ボールを追いかけで捕る。
II	
III	

(オ) 個別の教育支援計画等の活用を明確にした指導案の作成

指導案を作成するにあたり、「体育学習に関する個別の教育支援計画等との関連」という項目を設けた。昨年度までは、生徒の実態と単元の目標を関連させた個人目標を設定していた。今回は、本項目を設けたことで他教科等の目標とも関連付けられている個人目標であることを、指導案を通して、授業に関わる教師と情報共有を図った。

【資料1】 検証授業Ⅰにおける個別の教育支援計画等を活用した個人目標

<p>生徒の実態</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動経験が長く、思い通りに動かして投げることができ、ボールを握ることも得意な生徒が大半を占めている。 ・友達の投げ方を見習って、投げ方を工夫している生徒もいる。 ・投げたボールが、友達の顔や身体に当たると、怒り出す生徒もいる。 ・投げたボールが、友達の顔や身体に当たると、怒り出す生徒もいる。 	<p>個人目標の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動経験が長く、思い通りに動かして投げることができ、ボールを握ることも得意な生徒が大半を占めている。 ・友達の投げ方を見習って、投げ方を工夫している生徒もいる。 ・投げたボールが、友達の顔や身体に当たると、怒り出す生徒もいる。 ・投げたボールが、友達の顔や身体に当たると、怒り出す生徒もいる。
--	--

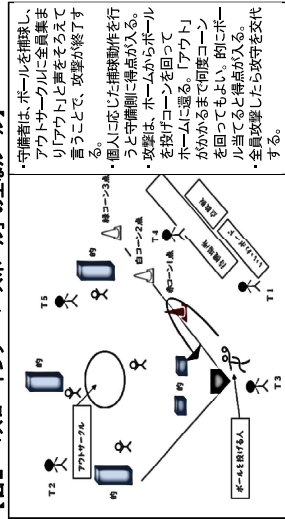
イ 検証授業

(ア) 授業の概要

単元名は、「スロウイング・ベースボール」（全7時間）である。集団スポーツが必要となる「投げる・捕る動作の習得」「協力」を組み合わせて設定した。主なルールは【図2】のとおりである。


(イ) 授業の実際

【図2】 「スロウイング・ベースボール」の主なルール



- ・守備者は、ボールを捕球し、アウトワークに委属集まり「アウト」と声を発して、塁を占める。
- ・塁に侵入した捕球動作を行うと守備側はアウトとなる。
- ・攻撃は、ホームからボールを投げ、ベースを回ってホームに戻る。「アウト」がかかるまで何度ボールを回ってもよい。初ボール当たるまで得点が入る。
- ・全員攻撃したら攻守を交代する。

(イ) 授業の実際

<p>学習の様子</p> 	<p>生徒、教師の様子及び保護者の声</p> <p>【生徒の様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達に狙う的をアドバイスする姿がみられた。 ・得点係などを主体的に行う姿がみられた。 ・狙って投げることやボールを捕りに行くこととする意欲も高まり、捕球動作が身に付いた生徒もいた。 ・「いいねシール」を用いて、友達の応援やアドバイス等の姿を想起させ、友達の称賛する場を設定した。「○○君の一生懸命な声を出しているところが良かった。」と発表する生徒もいた。 ・保護者との連絡帳に「体育の時間に友達からほめられたと嬉しそうに話していました。」と記入してあった。 <p>【教師の様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・応援や協力、アドバイスなどの項目別のMV賞を設け、生徒の姿を見るポイントがはつきりした。
---	---

(2) 検証2

検証2の実施時期は、年間指導計画において陸上運動の長距離走が位置付けられていた。検証1は、生徒の実態等からのボトムアップ的な話し合いに議論が集中してしまったり反省を受け、単元の目標について全員で合意形成を図り、授業づくりを実施した。

(ア) 教科会の実践

(ア) 教科会の概要

<p>目的</p>	<p>個別の教育支援計画等を活用し、長距離走の単元目標を設定して指導の方向性を定める。</p>
<p>実施日時</p>	<p>9月27日の50分間で実施</p>
<p>準備物</p>	<p>検証1の授業で使用した単元目標</p>
<p>その他</p>	<p>参加者、研究員の立場は、検証1と同様</p>

(イ) 教科会の活動の様子と支援の手立て

活動の様子	支援の手立て等
	<ul style="list-style-type: none"> 前回は作成した生徒や保護者の思いや願いをK1法でまとめた図を提示した。 前回の授業で作成した、単元の目標を参考にして、今回の単元目標を作成した。 意見や付箋に書かれた文言を確認しながら、ホワイトボード等を書いたり、貼ったりした。 長距離走が嫌いな生徒、時間や教の概念が充分でない生徒への目標を具体的に考えた。 目標設定の際に、個人からグループ、全体へと合意を図った。

(ウ) 個別の教育支援計画等を活用した単元設定

教科会で、【資料2】の単元目標を設定した。楽しさを感じるための技能面の向上と、協力する態度の育成を目指した学習活動を2つ設定した。

【資料2】 本時の単元目標

2. 目標

- 個別の思いや願いを参考に、各グループが自分の取り組みたい学習活動を選択し、単元の目標や学習活動の達成状況を振り返り、学習活動の振り返りや振り返りシートを記入し、達成度の確認を行う。
- 自分や各グループの思いや願いを参考に、達成度の確認を行う。
- 各グループの思いや願いを参考に、達成度の確認を行う。
- 各グループの思いや願いを参考に、達成度の確認を行う。

た。1つ目は「ラン・ラン チャレンジタイム」と称し、音楽や友達に合わせてグループで走る活動である。2つ目は「ラン・ラン 玉入れ」とし、スタート地点にあるカゴから15mほど離れた所にあるおじやみやみを時間内に往復して入れる活動である。

(エ) 実態に応じた支援方法の設定
時間などの抽象的な概念が定着していない生徒に対し、音楽を手掛かりとした、自立活動の目標を参考に、コミュニケーション関係について記載のある生徒に対し、それらの課題が意識しやすいグループ編成を行った。

(オ) 個別の教育支援計画等の活用をより明確にした指導案の作成
本人の思いや願いが曖昧な場合に、担任が生徒から聞き取りを行い、本人の思いや願いを明確にし、【資料3】のように個人目標設定に活用した。

【資料3】 個別の教育支援計画等と個人目標との関係性

個人目標	個別の教育支援計画等との関係性
<p>初めの本人の願いは、「ラリーがスターに会いたい」「てあつた。聞き取ることで、先生たちをのっくりさせた」。さらに「認めてもらいたい」というニーズがあることを共通理解した。</p> <p>「自分の思いや願いを参考に、達成度の確認を行う」という目標を設定した。</p>	<p>体育学習に関する個別の教育支援計画等との関係性</p> <p>個人目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 力強いボールを一つ運び、講師の言葉かけを受け、気持ちよく走ることもできる。 ・ グループの達成の顔を見て、前の人を抜かすこともできる。 ・ 友達と協力して走ることもできる。 ・ 友達と協力して走ることもできる。 ・ 友達と協力して走ることもできる。 <p>個人目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自分や友達の思いや願いを参考に、達成度の確認を行う。 ○ 自分や友達の思いや願いを参考に、達成度の確認を行う。 ○ 自分や友達の思いや願いを参考に、達成度の確認を行う。 <p>学習活動場面では本人の思いや願いを参考に、達成度の確認を行う。</p>

イ 検証授業の実践

(ア) 検証授業の概要

単元名は、「ラン・ラン ランニング」(全13時間)である。教科会で検討された目標を基に学習内容(「ラン・ラン チャレンジタイム」、「ラン・ラン 玉入れ」)を設定した。

(イ) 授業の実態

学習の様子	生徒・教師の様子
	<p>【生徒の様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本単元の活動は、「音楽のリズム」や「友達」とベースを合わせて、グループで取り組む活動である。曲の終わりと同時にゴールへ着くように走るペースを考え、20mの幅でスタート地点を調整してよい。 ・ 一人ではすぐにペースを落とすしまう生徒も友達に合わせて走る姿が見られた。ゆっくりに走り、走り続けることで個人等で決めた走り方を意識することもできた。 <p>【教師の様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教科会で共通理解した目標に沿った教師の言葉かけが向えた。 ・ 各グループに教科会に参加した教師とそうでない教師とを配属した。技能面や授業に関する事を、お互いに確認し合う姿がみられた。

3 結果

(1) 教科会のアンケート結果

教科会に参加した教師4名に対して、教科会と授業等に関するアンケートを7月と11月に実施した。質問項目数は、事前調査が14項目、事後調査が15項目であった。

教科会に関する質問では、事前事後ともに、意見を出しやすい雰囲気であると全員が回答した。また、教科会に参加していない教師との情報共有は全員が必要であると回答した。「実際に情報共有をしているか」の質問では、事前は、「どちらかといえば思う」、「思わない」が半数ずつであり、事後は、「どちらかといえば思う」「どちらかといえば思わない」が、それぞれ半数であった。「教科会を行った感想等」の自由記述は以下のとおりであった。

- ・ T1以外の先生と指導の方向性、学習内容、支援などを個別の指導・支援計画から話すことができ、大切なことだと思った。
- ・ 誰がT1になっても同じような授業ができ、何かしらの形でT1が代わっても問題ないと思った。他の教師と内容のやり取りができるようになった。
- ・ 単元ごとに目標や実態について話すこと、グループ編成や目標の共通理解は大事だと思った。
- ・ 個別の指導計画に参考となるものがいろいろあった。

個別の教育支援計画等を活用した授業づくりに関する質問では、授業を計画する際に個別の教育支援計画等を活用することの重要性は理解しつつも、活用していないことが多かった。事後調査では、「今後も個別の教育支援計画等を活用したいか」との問いに全員が「そう思う」と回答し、体育以外の授業づくりにも全員が活用したいと回答した。

以下は、今回の教科会、授業後にを行ったアンケートの回答である。

- ・ 重複障がい学級の生徒に対する手立てが難しいと感じた。また、どうしても授業では担任等が対応することになるので、教科担任としての関わりも課題だと感じた。
- ・ 生徒一人一人が、楽しそうに参加できていた。自分たちで振り返って課題を見付けるなどグループでの活動が積極的になった。体育科以外の先生も協力的だった。
- ・ これまでT1に任せ指示を受けて動くことも多かった。教科会で目標を目標をみんまで決めたことで生徒への言葉かけの基準もはっきりしたと感じた。
- ・ 技能面が高くない生徒へ意識的に言葉かけを行った。
- ・ 子供たちの将来や興味関心を生かした教材の工夫を行うことで意欲的に取り組み、子供たちが楽しむ姿を見ることができた。手立てや目標の立て方が参考になった。
- ・ 教師間のチームワークがよくなった。T3へゲーム進行の役割を預ける、T1が生徒の様子などの全体的な把握をするなどの役割が分担できた。

標に沿ったものに統一され、教師の指導や支援の方法にも改善が見られた。教師対象の事後のアンケートからも「言葉かけの基準がはつきりした。」等の肯定的な意見が聞かれ、個別の教育支援計画等を活用して目標を設定していくことが、T・Tを円滑に進めるうえでも意義があると言える。

(2) 教科会の在り方

福山(2017年)は、共通理解の困難性の原因として、「打合せ時間の確保」を示し、窪田ら(2016年)は、個別の教育支援計画を授業で活用するために「効率的な打合せ」が必要だと示している。そこで、既存の教科会が効率的なものとなるために、話し合いのルールやゴールを明確に示し、意見の出しやすさや雰囲気づくりや協議をする視点を定めた。また、付箋紙やKJ法などを用いて意見を発散・収束する等、ファシリテーションの技法に加えて、個別の教育支援計画等を手元に置き、いつでも確認できるように配属した。これらの対応により、生徒の将来像や実態に対する支援方法等について具体的な意見が活発に出され、事後のアンケート結果からも、話し合いの過程において個別の教育支援計画等が参考になったという回答を得られた。教科会で個別の教育支援計画等を活用したことが、授業場面において言葉かけの統一等の様々な変化につながったことから、萩庭(2017年)の言う、「個別の教育支援計画等が教師間の連携ツールとしての可能性」を見出すことができ、さらに、ファシリテーションにより教科会を活性化することができたのではないかと推察する。

Ⅵ 研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) 個別の教育支援計画等を活用した教科会を行うことで、豊かなスゴーツライフと授業内容が関連付けられ、体育学習における「知る」「みる」「支える」「知る」授業を構成することができた。
- (2) 授業を計画する段階から教科会の参加者全員で検討したことは、教師の共通理解をより深め、T・Tによる協働体制の高まりにつながり、生徒に運動の楽しさを感じさせることができた。
- (3) 教科会において、個別の教育支援計画等を活用したことやファシリテーションの技法を用いたことにより、議論の方向性が定まり、教科会の活性化を図ることができた。

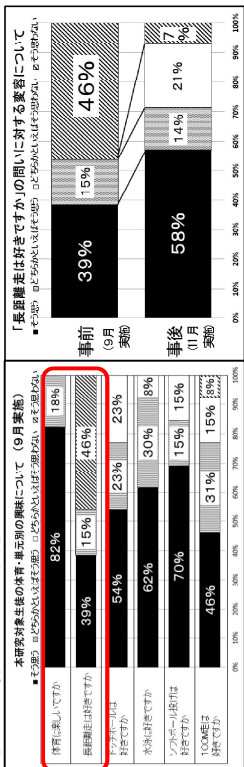
2 今後の課題

- (1) 個別の教育支援計画等を活用した授業を行うためには、個別の教育支援計画の中に、生徒が目指す姿を具体的に書き込むなど、活用につながる様式を検討していく必要がある。
- (2) 本研究の授業づくりについては、作成から実施までのプロセスの在り方を中心に取組取り、今後、実施後の個別の教育支援計画等の加筆修正なども含め、PDCAサイクルの中で教科会の在り方についても検討が必要である。
- (3) 本研究は、教科別の指導である体育の授業での取組であったが、他の教科別の指導や各教科等を合わせた指導等においても、本研究の取組を汎用できるか検証する必要がある。

参考・引用文献等
 「個別の教育支援計画の作成と活用に関する現状と今後の方策-特別支援学校教員に対する質問紙調査から-」(2017年 藤井慶博・高田屋陽子 秋田大学)
 「個別教育計画を活用した指導の充実に関する研究(最終報告)」(2016年 窪田朝子・羽根寛代 神奈川県立総合教育センター)
 「特別支援学校(肢体不自由)における自立活動を主として指導する教育課程に関する基礎的調査-教師の働く指等の取組に着目して-」(2010年 一木薫・安藤隆男 障害科学研究所)
 「特別支援学校における『個別の指導計画』の活用及び活用実態と課題」(2016年 佐々木未・若手六介)
 「特別支援学校(知的障害)に在籍する 自閉症のある幼児児童生徒の実態の把握と指導に関する研究-目標のつながりを中心とした指導の検討-」(平成28年度～29年度)
 「特別支援教育におけるアーム・アーム・アーム・アームに関する一考察-知的障害特別支援学校におけるアーム・アーム・アームの長所項目表とATの支援計画表を作成して-」(2018年 福山恵美子 大阪総合体育大学)
 「個別の教育支援計画の活用に関する研究-一人一人の教員が主体的に取り組む校内研修の在り方-台意形成を図るためのコミュニケーションを活用する研修の工夫-」(2008年 清岡真穂 教育実践研究センター)
 「個別の教育支援計画及び個別の指導計画の作成と活用」(2017年 萩庭圭子 東洋館出版)
 「障害者基本計画(第4次)」(平成30年 内閣府)
 「特別支援学校 効能指教育要領 小学部・中学部学習指導要領」(平成29年 文部科学省)

(2) 生徒のアンケート結果
 研究対象校の中学部第2学年の生徒18名に対して、体育授業に関するアンケートを7月と11月に実施した。質問項目数は、事前調査が6項目、事後調査が7項目であった。
 【図3】【資料4】は、生徒のアンケート結果の一部である。

【図3】生徒のアンケート結果



【資料4】生徒のアンケート結果における自由記述の一部

質問7 スローイング・ヘビーショットの種類の説明を教えてください(10月実施)

「ボールを投げるときはボールが落ちてきたら、ボールをキャッチしてボールを投げます。」

「ボールを投げるときはボールが落ちてきたら、ボールをキャッチしてボールを投げます。」

「ボールを投げるときはボールが落ちてきたら、ボールをキャッチしてボールを投げます。」

「体育の授業は楽しいですか」と「友達を応援することは好きですか」の回答は、いずれも高い数値を示すも、事前と事後に大きな変化は見られなかった。

4 考察

- (1) 個別の教育支援計画等の活用の仕方
 本研究では、授業づくりの中心に教科会を位置付け、授業の計画段階から個別の教育支援計画等の活用を試みた。
 個別の教育支援計画の活用としては、授業計画を作成する前に、個別の教育支援計画の本人や保護者の思いや願いをKJ法等により共通理解を図り、現段階において必要となる技能や態度を整理した。次に、授業の計画段階では、それらの情報を踏まえた単元の目標等の設定や、医療機関との連携に関する項目を活用した運動時の安全管理や配慮について共通理解を図った。
 個別の指導計画の活用の仕方については、他教科等の目標や手立てを参考にしながら、個人の目標設定や生徒の支援方法、教材の工夫を行った。
 個別の教育支援計画等の活用を通して、学習内容や教師の関わり方から以下のような変化がみられた。これまでの授業計画は、生徒の実態と前年度の計画等を基に授業内容が作られていた。一木ら(2010年)によると、特別支援学校では、前年度を踏襲した指導に陥りやすさや不適切さを指摘している。今回の検証授業における学習内容では、「ティールボール」から「スローイング ベースボール」、「長距離走」から「ラン・ラン ランニング」と大きく変わり、結果として体育における運動への多様な関わり方(「知る」「支える」「みる」)を授業内容に位置付けることができた。この結果や生徒の「みんなと応援できて楽しかった」等のアンケート記述から、個別の教育支援計画等を活用したことで、新たな計画や運動との多様な関わりが見られる学習活動を展開することができたと考える。また、担当者全員で目標を設定する過程で、目標だけでなく指導観そのものが共有されていき、教師の配置や言葉かけ等が日

I 研究主題

特別活動を要としたキャリア教育の研究

～宮崎県版「キャリア・パスポート」の開発と活用を通して～

II 主題設定の理由

今日、A I、人生100年時代というキーワードに代表されるように、日本の社会システムが大きく変容しつつある。このような時代において、児童生徒が様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること等、たくましく生き抜く力を身に付けることが必要になっている。

こうした状況を踏まえ、小学校学習指導要領(平成29年3月告示)総則では、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ、各教科等の特質に応じてキャリア教育の充実を図ることが示された。そのため、特別活動第2〔学級活動〕2内容(3)に「一人一人のキャリア形成と自己実現」(以下 学級活動(3))、3内容の取扱いに「学級活動(3)の指導に当たっては、学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うこと。その際に、児童が活動を記録し蓄積する教材を活用すること」が新たに設けられた。更に、この学習指導要領の改訂を受け、「キャリア・パスポート」例示資料(平成31年3月)(以下 例示資料)が、各都道府県、各地域・各学校における実態に応じてカスタマイズすることを前提に文部科学省から配付され、キャリア・パスポートの目的が以下のように整理されている。

「キャリア・パスポート」の目的

小学校から高等学校を通じて、児童生徒にとっては、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につながるもの。

教師にとっては、その記述をもとに対話的にかわるることによって、児童生徒の成長を促し、系統的な指導に資するもの。

本県においては、中学3年生(県内公立中学校)を対象とした「みやざきの教育に関する調査」(平成29年宮崎県教育委員会)において、将来の職業や生き方を「考えている」または、「ある程度考えている」と回答した生徒の割合は、88.5%と高い状況にある。一方で、高校新規卒業者と大学新規卒業者の1年以内及び3年以内の離職率は、全国平均よりも高い傾向が続いており、早期離職の理由で上位にある「実際に働いてみると仕事が自分に合わなかった」「職場の人間関係」への対応が課題となっている。そのため、宮崎県教育振興基本計画(令和元年策定)で、「各学校段階における一貫したキャリア教育の推進」を位置付けている。

そこで、本研究では、キャリア・パスポートの導入に向けて、例示資料を分析し、小学校から高等学校の連携を重視した児童生徒の自己実現につながる宮崎県版「キャリア・パスポート」を開発する。研究を進めるに当たって、児童生徒の「自己実現につながる」ことを「基礎的・汎用的能力を育む」と捉えるが、基礎的・汎用的能力は、児童生徒の実態によって、どの程度身に付けさせるかが異なると考えられる。そのため、宮崎県版「キャリア・パスポート」の大きな特色は、小学校から高等学校までの発達段階を意識し、各学校がそれぞれの課題を踏まえて具体的な能力(以下「身に付けさせたい力」)を目標として設定し、キャリア教育の計画、実践、評価、改善を容易にする。研究の中で宮崎県版「キャリア・パスポート」を活用する際は、宮崎小学校の実態を踏まえた宮崎小学校版「キャリア・パスポート」を作成し、学級活動(3)を中心としつつ各教科等と往還した指導と、児童の記述をもとに対話的にかわる指導に役立てられるようにする。

学級活動(3)では、本時のねらいに迫る手立てとして、宮崎小学校で身に付けさせたい力を学習過程に位置付け指導の充実を図ることとする。

小学校から高等学校の連携を重視した児童生徒の自己実現につながる宮崎県版「キャリア・パスポート」を開発することは、本県のキャリア教育の推進にも貢献できると考え、本主題を設定した。

III 研究目標

小学校から高等学校の連携を重視した児童生徒の自己実現につながる宮崎県版「キャリア・パスポート」を開発する。

IV 研究仮説

宮崎県版「キャリア・パスポート」を開発して、学級活動(3)を中心としつつ各教科等と往還した指導及び児童の記述をもとに対話的にかわる指導で活用すれば、基礎的・汎用的能力を高めることができるであろう。

V 研究内容

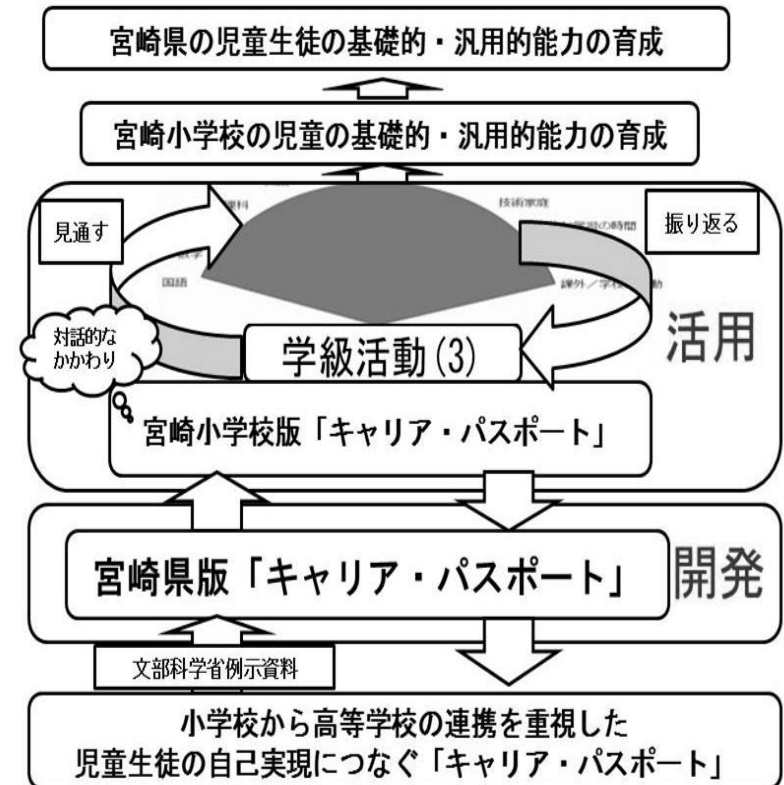
1 宮崎県版「キャリア・パスポート」の開発

- (1) 例示資料の分析
- (2) 宮崎県版「キャリア・パスポート」の特色
- (3) 宮崎県版「キャリア・パスポート」の見直し

2 宮崎県版「キャリア・パスポート」の活用

- (1) 宮崎小学校版「キャリア・パスポート」の作成
- (2) 「学級活動(3)」の実践
- (3) 「対話的なかわり」の実践

VI 研究構想



Ⅶ 研究の実態

1 宮崎県版「キャリア・パスポート」の開発

(1) 例示資料の分析

例示資料を分析すると、【資料1】のような構造であることが分かった。また、宮崎県版「キャリア・パスポート」として改善したい内容と理由【資料2】を明確にした。

【資料2】改善したい内容と理由

	改善したい内容	理由
ア	小学校版には、「身に付けさせたい力」の例が記載されている。	各学校が例をそのまま活用してしまい、児童の実態に応じたキャリア教育が実践されない可能性がある。
イ	中学校版には、「身に付けさせたい力」を自己評価する項目がない。	教師にとって、キャリア教育を体系的に指導することや指導計画を改善することが困難になる。
ウ	キャリア・パスポートの意義が明記されていない。	児童生徒にとって、キャリア・パスポートの目的を理解することが困難になる。

(2) 宮崎県版「キャリア・パスポート」の特色

宮崎県版「キャリア・パスポート」は、【資料1】をそのまま活かし、かつ、【資料2】を盛り込むように作成した。

宮崎県版「キャリア・パスポート」の特色は以下の通りである。

ア 「身に付けさせたい力」を空欄にする

例示資料で、学校が身に付けさせたい力について、【資料3】のように例示されているが、宮崎県版「キャリア・パスポート」(小学校版の項目『小学校でがんばってほしいこと』)では、空欄にした。

ただし、学校が児童生徒の実態に応じて設定できるように、「設定の方法」は教師用等に示した。

【資料3】身に付けさせたい力 例示資料(左)と宮崎県版「キャリア・パスポート」(右)

例示資料	小学校(高学年)で がんばってほしいこと	宮崎県小学校 高学年でがんばってほしいこと
<p>変化の激しい社会をたくましく生きていくために必要な力を、整理しました。小学校生活を送る上で参考にしてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 友達や家の人の話を聞くとき、その人の考えや気持ちを分かろうとすること ○ 自分の考えや気持ちを、相手にわかりやすく伝えようと気を付けること ○ 調べたいことや知りたいことがあるとき、自分から進んで資料や情報を集めたり、誰かに質問したりすること ○ 何かをするとき、計画を立てて進めたり、途中でやり方に工夫したり、見直したりすること 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 委員会、係、当番活動などで、自分から仕事を見つたり、役割分担したりしながら、力を合わせて行動すること ○ 好きでないことや苦手なことで、自分から進んで取り組むこと ○ 自分の夢や目標に向かって、生活や勉強の仕方を工夫する 	<p>変化の激しい社会をたくましく生きていくために、小学校生活でがんばってほしいことをまとめました。学校や家庭、地いきで目標を決める時などの参考にしてください。</p>

イ 中学校版に「身に付けさせたい力」を自己評価する項目を設定する

例示資料では、小学校版にのみ設定されており、中学校版は、基礎的・汎用的能力を全体的に自己評価するよう設定されている。宮崎県版「キャリア・パスポート」は、発達の段階を考慮して【資料4】のように中

【資料1】例示資料(文部科学省)の構造

内 容	作成者
1 校長メッセージ ※ 学校で身に付けさせたい力	学校
2 学年の見通し ※ 自己理解・実践内容等	児童生徒
3 学期の振り返りと見通し	児童生徒
4 学年の振り返りと次学年の見通し	児童生徒
5 行事の見通しと振り返り	児童生徒

【資料4】生徒による自己評価項目(中学校版)

3 「2年生で身に付けた力」について振り返ろう。		
身に付けた力についての自己評価 (4:よくできた 3:できた 2:少しできた 1:あまりできなかった)		評価

学校版まで設定することとした。

ウ キャリア・パスポートの意義を明記する

宮崎県版「キャリア・パスポート」では、児童生徒が、小・中・高を通して継続して学ぶ意義を理解することができるようにした【資料5】。

(3) 宮崎県版「キャリア・パスポート」

の見直し

宮崎小学校版「キャリア・パスポート」を活用した授業を基に、意思決定をさせる視点で宮崎県版「キャリア・パスポート」を【資料6】のように見直しを行った。

【資料5】児童生徒向けの説明(小学校版)

『キャリア・パスポート』とは

このキャリア・パスポートは、自分のがんばりと成長を記録するものです。キャリア・パスポートに書いたがんばりは、あとで自分をほめてくれます。そして、夢にむかってチャレンジする力をつけてくれます。

小学校 → 中学校 → 高等学校

学習や生活などをふり返ったり、見直したりすることで、自分の成長を実感できます。

【資料6】修正した箇所とその意図

	修正前	修正後
意思決定	○こんな自分になりたい！！	○今年度がんばること(目標)とそのためになることを決めよう。
振り返り	○なりたい自分にどれだけ近づけたか、ふりかえりましょう	○自分で決めた目標やそのためになることをふり返ろう。
な将来とのつ	『なりたい自分』を目標等の表記にすることで、「将来のイメージ」を「遠い未来」と「近い未来」の両方で捉えることができたようにした。	
	来学期の自分へのメッセージ 他の設問での評価が可能であり、書く全体量を考慮して削除する。	

2 宮崎県版「キャリア・パスポート」の活用

(1) 宮崎小学校版「キャリア・パスポート」の作成

ア 宮崎小学校で身に付けさせたい力の設定

宮崎小学校の実態を把握し、卒業時に目指す児童像を設定するために、キャリア教育アンケートを右記のとおり実施した。キャリア教育アンケート結果(一部抜粋)と全国学力・学習状況調査の結果を踏まえて、設定した卒業時に目指す児童像は、次頁【資料7】のとおりである。

○ 対象	宮崎小学校児童363名
○ 調査内容	小学校キャリア教育の手引き(平成23年)に示されている「基礎的・汎用的能力アンケート」に基づいて、項目を設定した。
○ 調査方法	質問に対して、4(いつもしている)3(ときどきしている)2(あまりしていない)1(していない)の4件法で回答を求めた。
○ 調査時期	令和元年6月

【資料7】宮崎小学校の現状と卒業時に目指す児童像

キャリアアンケート結果					
質問に対して、4(いつもしている)3(ときどきしている)2(あまりしていない)1(していない)の4件法で回答を求めた。					
基礎的・汎用的能力 『力』内は、宮崎小学校で設定したキーワード	質問事項(高学年版)【設問の主旨】	全校平均	1年生平均	6年生平均	1年生と6年生との差
人間関係形成・社会形成能力 →『 かかわる力 』	相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしているか。 【他者に働きかける】【コミュニケーションスキル】	3.24	3.76	2.96	-0.80
自己理解・自己管理能力 →『 じりつする力 』	自分の興味や関心、長所や短所などについて、把握しようとしているか。 【自己の理解】【自己の動機付け】	3.06	2.92	2.94	0.02
課題対応能力 →『 考える力 』	分からないことやもっと知りたいことがある時、自分から進んで資料や情報を収集したり、だれかに質問をしたりしているか。 【情報の理解・選択・処理等】	3.21	3.37	2.81	-0.56
キャリアプランニング能力 →『 見通す力 』	学ぶことや働くことの意義について考えたり、今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えたりしているか。 【学ぶこと働くことの意義の理解】【多様性の理解】	3.23	3.59	3.09	-0.50

対象 令和元年度宮崎小学校児童363名

全国学力・学習状況調査から見た課題

- 地域や社会での出来事に対する関心【見通す力】
- 学ぶこと・働くことの意義の理解【見通す力】
- 他者と協働して課題解決に臨む姿 【かかわる力】【考える力】

<p>地域・児童生徒・学校の現状、課題の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> 話し合い活動で相手の考えを聞き、自分の考えを伝えることに苦手意識をもつ児童が少なくない。 人の役に立つ人間になりたいと思う児童の割合が多いが、具体的な行動にうつすことができていない。 困難に負けない子どもになってほしい。 進路を切り拓く基礎的・基本的な学力を身に付けてほしい。 規則正しい生活習慣を身に付けてほしい。 	<p>卒業時に目指す児童像</p> <ul style="list-style-type: none"> 他者と力を合わせ、行動する子ども 具体的な目標を立てて行動できる子ども 苦手なことにも自分から取り組む子ども 学ぶことの意義を理解できる子ども 自分の目標に向けて学習や生活の仕方を工夫する子ども
---	---

なお、宮崎小学校では、基礎的・汎用的能力をそれぞれ『かかわる力』『じりつする力』『考える力』『見通す力』で示しており、宮崎小学校での実践については、同様に表記する。

【資料7】を踏まえ、宮崎小学校で身に付けさせたい力を【資料8】のように設定した。また、『かかわる力』『見通す力』を、特に身に付けさせたい力と設定し、重点的に指導することにした。

【資料8】宮崎小学校で身に付けさせたい力

<p>『かかわる力』</p> <p>相手が理解しやすいように工夫しながら自分の考えや気持ちを伝えようとしている。</p> <p>低 ともだちとなかよくする。 中 自分の考えや気持ちをあい手に分かりやすく伝えようとしている。 高 相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしている。</p>	<p>『じりつする力』</p> <p>自分の長所等を知ろうとする。</p> <p>低 じぶんのよいところをみつけようとする 中 自分のよいところなどについて見つけようとする。 高 自分の長所等について知ろうとする。</p>
<p>『考える力』</p> <p>どうすればうまくいくか進め方を考えながら計画を立てる。</p> <p>低 いいほうほうをかんがえる。 中 どうすればうまくいくか、考えてすすめている。 高 どうやればうまくいくか、進め方を考えながら計画を立てる。</p>	<p>『見通す力』</p> <p>今学校で勉強していることと自分の将来とのつながりを考えている。</p> <p>低 もくひょうをきめてがんばる。 中 何のために勉強するのか考える。 高 (何のために勉強するのか考える等)今学校で勉強していることと自分の将来とのつながりを考えている。</p>

(2) 学級活動(3)の実践

ア 学習過程

学級活動(3)は、児童生徒に見通しをもたせたり、振り返りをさせたりしながら、学校における学ぶ意義の認識を深めさせる役割を担っている。そこで、学級活動(3)の学習過程を次頁【資料9】のようにまとめた。また、意思決定した目標に対して、帰りの会等を利用して、定期的な振り返りを行い、自分の目標の達成度を把握させたり、達成

困難な目標に対しては、教師

の支援により、目標の修正を行ったりさせる等、児童の実践意欲が持続できるように手立てを講じた。

(7) 学ぶ意義の理解

本時のねらいに迫る手立てとして、宮崎小学校で身に付けさせたい力を学習過程に位置付けることにした。なりたいたい自分を探すきっかけをつくることや、見通したり振り返ったりしながら自分の長所や将来の夢から目標と結び付けた意思決定が少しずつできるように、『見通す力』の認識を深めさせるようにした。

(4) 集団思考を生かした個々の意思決定

学級活動は他者との様々な集団活動を行うことを基本とし、そこで話し合いを全ての活動の中心に置いている。そこで、グループでの話し合いを通して、個人思考で得た考えを説明し合わせたり、全体で共有させたりする等、意思決定に向けて多様な意見に触れさせることで、『かかわる力』の育成を図ることにした。



イ 検証授業

(7) 「6年生になって」

a 本授業のめあて

なりたいたい自分に近づくためにこれから取り組むことを話し合い、自分に合った目標やそのためにすることについて意思決定することができる。

b 本授業における宮崎小学校版「キャリア・パスポート」を活用した場面と児童の様子

	<p>学ぶ意義の理解</p> <p>キャリア・パスポートを活用し、宮崎小学校で身に付けさせたい力について具体例を交えながら説明し、学校や家庭、地域での学びが将来の自分とつながっていることや目標に向かって努力する意義を理解させた。</p>
	<p>意思決定</p> <p>グループ活動で得た考えを整理し、なりたいたい自分の姿と今とを結びつけながら、キャリア・パスポートに自分に合った目標や活動内容を記入させた。</p>

c 宮崎小学校版「キャリア・パスポート」の活用に関する成果と課題(○成果●課題)

- 宮崎小学校で身に付けさせたい力を明確にすることで、児童に特にがんばって取り組んでほしいこととして、今と将来とを結びつけながら指導することができた。
- 具体的な活動内容まで含めて意思決定させることで、事後の実践において何を頑張ればよいかわ明瞭にさせることができ、児童の実践意欲が持続した。
- 意思決定の場面において、「なりたいたい自分」という設問が抽象的で、イメージをもつことができないまま活動が滞ってしまう児童が見受けられた。
- 自分の長所や将来の夢と目標とを結び付けることができない児童がいた。

(4) 「1学期を振り返って」



a 本授業のめあて

目標をもつこと、学ぶことについて、よりよく生きるための課題を認識し、解決方法などについて話し合い、自分に合った解決方法を意思決定することができる。

【資料9】学級活動(3)の学習過程

学習過程	活動内容	「キャリア・パスポート」の活用		
事前	① 問題の発見・確認	日常生活における共通の問題から教師が設定した題材について知り、自己の現状を理解したり、解決すべき自己の課題や将来に向けた自己の生き方に関する課題を見いだしたりする。	○ これまでの実践を通して自分が努力した過程に気付く。 【じりつする力】	各教科等
本時	② 解決方法等の話し合い	題材について、共通の問題について確認し合い、原因や改善の必要性を探ったり、具体的な解決方法等を見付けたりするために話し合う。	○ 自分の将来の夢や目標、長所等 【かかわる力】 ○ 行事等の意義 【見通す力】	
	③ 意思決定	話し合い活動で見つけた解決方法を参考にし、自分に合った具体的な解決方法を決めるなど、「意思決定」する。 →『 集団思考を生かした個々の意思決定 』	○ 意思決定 【考える力】 【見通す力】	
事後	④ 決めたことの実践	意思決定した解決方法や活動内容について粘り強く実践する。	○ 教師による対話的なかかわり 【じりつする力】	各教科等
	⑤ 振り返り	実践を定期的に振り返り、意識化を図ると共に、結果を分析し、次の課題解決に生かす。実践の継続や新たな課題の発見につなげる。	○ 実践の振り返り 【考える力】 【かかわる力】	

b 本授業における宮崎小学校版「キャリア・パスポート」を活用した場面と児童の様子

	振り返り キャリア・パスポートを活用し、意思決定した目標や活動内容について振り返ったことを伝えた。
	意思決定 グループ活動で得た考えの中から自分に合うものを整理し、意思決定した今後の目標や具体的な活動内容をキャリア・パスポートに記入した。

c 宮崎小学校版「キャリア・パスポート」の活用に関する成果と課題(○成果●課題)

- 意思決定した目標や活動内容を定期的に振り返ることで、自己実現に向けて実践を重ねた児童が多く見られた。児童自身が努力した過程に気付くことができた。
- 『なりたい自分』を目標等の表記に修正し、「将来のイメージ」を「遠い未来」と「近い未来」の両方で捉えることができるようにしたことで、前回、意思決定の際に活動が滞っていた児童も、目標や活動内容を意思決定することができていた。
- キャリア・パスポートやワークシートといった複数枚のシートを比較しながら意思決定しなくてはならないため、シートが机上に活動が煩雑になる場面があった。

(3) 対話的なかかわりの実践

対話的なかかわりとは、児童生徒一人一人の気付きを促し、児童の自己有用感の醸成や自己変容の自覚に結び付けられるような記述による支援である。ここでは、検証授業で活用した宮崎小学校版「キャリア・パスポート」の記述に対して教師が行った対話的なかかわりについて2つの具体例を挙げる。

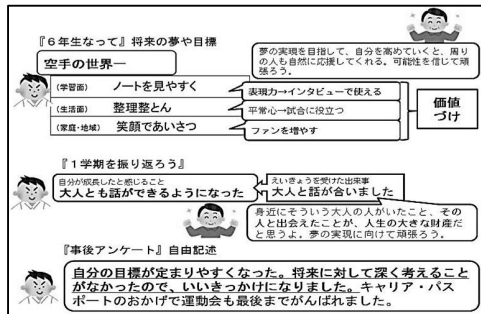
ア A児への対話的なかかわり

A児は、自己肯定感が低く、意欲的に取り組むことが苦手な児童である。1回目の検証授業では、夢や目標と活動内容が結びついていない記述をしていたので、夢や目標と活動内容を結びつける支援を行った。A児の事後アンケートの記述では、自分の目標が定まりやすくなったとの記述が見られた【資料10】。

イ B児への対話的なかかわり

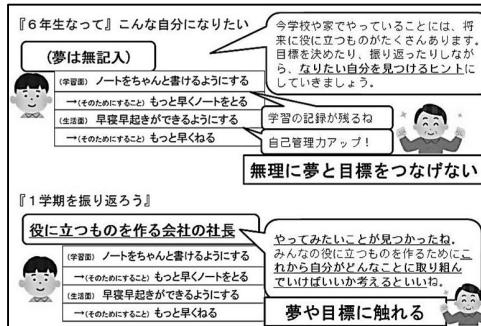
B児は、将来の夢がもてず、学習への支援を要する児童である。1回目の検証授業では、夢については無記入で、目標を羅列していたので、決めた目標を頑張ろうと支援した。2回目の検証授業では、「役に立つものを作る会社の社長」と夢を書いており、教師の記述も、児童の夢や目標に触れて支援を行った【資料11】。

【資料10】 A児への対話的なかかわり



『6年生になって』 将来の夢や目標
空手の世界
『1学期を振り返ろう』
事後アンケート 自由記述

【資料11】 B児への対話的なかかわり



『6年生になって』 こんな自分になりたい
『1学期を振り返ろう』
役に立つものを作る会社の社長

Ⅳ 考察

1 宮崎県版「キャリア・パスポート」の開発について

基礎的・汎用的能力は、包括的な能力概念であり、人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリア・プランニング能力(宮崎小学校では、『かかわる力』『じりつする力』『考える力』『見通す力』)は、それぞれが独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にある。これらの能力を同じ程度あるいは均一に身につけることは求められているものではない。本研究においては、「身に付けさせたい力」として設定する能力の変容だけでは

なく、設定されていない能力との比較や関連から考察を行うため以下のアンケートを行った。なお、本アンケート結果は、児童の自己評価を根拠としているため客観的データではないが、基礎的・汎用的能力の変容を図る根拠になると判断した。

- 対象 宮崎小学校版「キャリア・パスポート」を活用した第4学年から第6学年児童(事前188名、事後191名)
- 調査時期 令和元年6月から令和元年11月までの5か月間

キャリア教育アンケートにおける平均値の変容は、【資料12】のとおりである。

【資料12】 キャリア教育アンケート結果

基礎的・汎用的能力	番号	アンケート内容	4~6年				
			事前	事後	伸び		
かかわる力	①	友だちや家の人の意見を聞く時、その人の考えや気持ちを受け止めようとしているか。【他者の個性の理解】	3.32	3.35	0.03		
	②	相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしているか。【他者に働きかける】【コミュニケーションスキル】	3.07	3.17	0.10		
	③	自分から役割や仕事を見つけたり、分担したりしながら、周囲と力を合わせて行動しようとしているか。【チームワーク】【リーダーシップ】	3.30	3.36	0.06		
	じりつする力	④	自分の興味や関心、長所や短所などについて、把握しようとしているか。【自己の役割の理解】【自己の動機付け】	3.04	3.15	0.11	
		⑤	気持ちが沈んでいる時や、あまりやる気が起きない物事に対する時でも、自分がすべきことには取り組もうとしているか。【忍耐力】【ストレスマネジメント】	3.21	3.27	0.06	
		⑥	得意なことや苦手なことでも、自ら進んで取り組もうとしているか。【主体的行動】【前向きに考える】	3.13	3.12	-0.01	
		⑦	分からないことやもっと知りたいことがある時、自分から進んで資料や情報を収集したり、だれかに質問をしたりしているか。【情報の理解・選択・処理等】	3.13	3.18	0.05	
		⑧	何か問題が起きた時、次に同じような問題が起こらないようにするために、何をすればよいか考えているか。【本質の理解】【原因の追究】【課題発見】	3.19	3.20	0.01	
		⑨	何かをする時、見通しをもって計画的に進めたり、そのやり方などについて改善を図ったりしているか。【計画立案】【実行力】【評価・改善】	3.01	3.06	0.05	
	考える力	⑩	学ぶことや働くことの意義について考えたり、今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えたりしているか。【学ぶこと働くことの意義の理解】【多様性の理解】	3.15	3.23	0.08	
		見通す力	⑪	自分の将来について具体的な目標をたて、その実現のための方法について考えているか。【将来設計】【選択】	3.18	3.24	0.06
			⑫	自分の将来の目標に向かって努力したり、生活や勉強の仕方を工夫したりしているか。【行動・改善】	3.19	3.16	-0.03

【資料12】から、分かったことを以下のように整理した。

- (ア) 全体的に変容は小さい
- (イ) 「身に付けさせたい力」で設定した項目(番号②④⑦⑩)は、他の項目と比較すると伸びている。
- (ウ) 「身に付けさせたい力」に設定していない項目は、8項目中6項目で伸びている。(番号①③⑤⑧⑨⑫)

(1) 短期間で成果はでない

【資料12】(ア)から、大きな変容は見られなかった。これは、調査期間が短いことから、短期間の活用では、効果が表れにくいことが考えられる。ただ、わずかに向上していることや、事後アンケートにおける児童の感想とその要因【資料13】から、継続的に活用することで効果が高まることは期待できる。

【資料13】 事後アンケートにおける児童の感想とその要因

児童の感想	「要因」
C 友達の長所などを見つけたり、自分の長所を教えてもらったりしながら目標を立てられた。	自己理解に関する設問を設けたことで、自分のよさを見つめることができ、結果として自己理解につながった。
D 何のための学習で、何をするのか、したらどうなるのかなど、自分の目標に合った活動内容の設定や目標を達成したいという意欲が増した。	「キャリア・パスポート」の意義を示したことで、児童の実践意欲が高まった。
E キャリア・パスポートは分かりやすい。自分のためにいろいろ考えられて、活動内容に応じて計画を立てることができるから自分の行動が前よりよくなった。	目標だけでなく、具体的な方法まで含めて意思決定できるように開発したことで、課題解決の見通しをもたせることができた。
F 自分の気持ちに正直になってキャリア・パスポートを書くことができた。そして、決めた目標を毎日がんばりたいと思えるようになった。言われて決める目標ではなく、自分で決めることができる場所がいい。	
G 自分を振り返ることで、少しずつ自分の悪い癖が改善されたと思う。キャリア・パスポートを書くことで、自分のことがより分かった。	目標と評価の一体化を意識して開発したことで、学び方の理解につながった。

(2) 「身に付けさせたい力」を設定することは、基礎的・汎用的能力を高める

【資料12】(イ)から、「身に付けさせたい力」を設定することで、児童と目標を共有することができ、学校全体で計画、実践が容易になったと考えられる。また、【資料12】(ウ)から「身に付けさせたい力」に設定していない項目についても、「身に付けさせたい力」が伸びたことで、相互に関連・依存ながら副次的に伸びたと推察することができる。

(3) 小学校版では、現実的で近い目標を意思決定させるキャリア・パスポートが有効である

検証授業において、意思決定の場面で、活動が滞っていた児童の事後アンケート【資料14】から、児童が、意思決定の場面で活動が滞ったのは、小学校の段階では、H児のように、「なりたい自分」を「遠い未来」のことで捉えたり、I児のように、夢や目標が定まっていなかったりする児童が多いからではないかと考えられる。また、「なりたい自分」を目標等の表記に修正し、「将来のイメージ」を「遠い未来」と「近い未来」の両方で捉えることができるようにしたことで、書きやすいと感じたことが記述より伺える。

【資料14】意思決定の場面で、活動が滞っていた児童の自由記述

児童の感想	
H児	初めは、「なりたい自分」を考えるのが難しかった。でも、2回目の授業は目標だったから書きやすかった。
I児	夢や目標がまだ見つかっていないけど、今を頑張ることの大切さは分かった。

2 宮崎県版「キャリア・パスポート」の活用について

(1) 児童が、キャリア・パスポートに記述したいと思う実践を意思決定することが大切である。

事後アンケートにおける児童の感想とその要因【資料15】C児、D児、E児、F児の記述から、これからの学習への取り組み方や生活の仕方等をよりよくすることの大切さを理解していることが伺える。このことは、児童一人一人が、キャリア・パスポートを活用し、将来に向けて自分が解決したいと考えた課題が明確になったことで、課題解決に向けて自主的に取り組もうとする意欲が向上しているからであると推察できる。

【資料15】事後アンケートにおける児童の感想とその要因

児童の感想	「要因」
C児 友達の長所などを見つけたら、自分の長所を教えてもらったりしながら目標を立てられた。	集団思考を通して、多様な意見に触れさせたことで、児童のコミュニケーション力の育成や自己理解につながった。
D児 何のための学習で、何ですのか、したらどうなるのかなど、自分の目標に合わせた活動内容の設定や目標を達成したいという意欲が増した。	学ぶ意義を理解させたことで、今と将来のつながりを認識し、新たな学びの動機付けになった。
E児 キャリア・パスポートは分かりやすい。自分のためにいろいろ考えられて、活動内容に応じて計画を立てることができるから自分の行動が前よりよくなった。	目標だけでなく、具体的な方法まで含めて意思決定させたことで、課題解決の見通しをもたせることができ、キャリア教育に関わる諸活動での実践意欲の向上を図ることができた。
F児 自分の気持ちに正直になってキャリア・パスポートを書くことができた。そして、決めた目標を毎日がんばりたいと思うようになった。言われて決める目標ではなく、自分で決めることができるところがいい。	
G児 自分を振り返ることで、少しずつ自分の悪い癖が改善されたと思う。キャリア・パスポートを書くことで、自分のことがより分かった。	振り返りを行わせたことで、実践を振り返り、自分のよさを理解する等、自己理解を深めた。

(2) 学級活動(3)を中心としつつ各教科等と往還した指導は有効である。

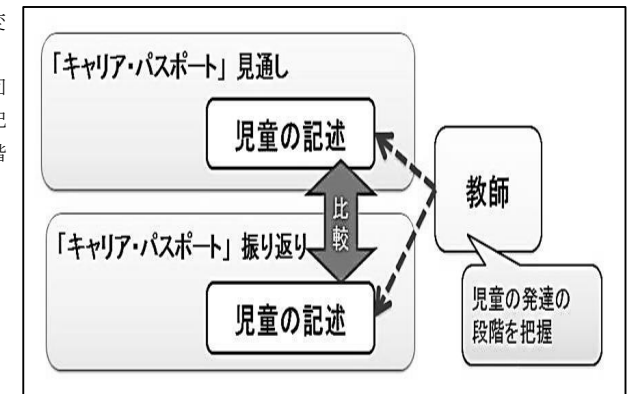
学級活動(3)の実践から、【資料15】E児、G児の結果を得られたことで、学級活動(3)と各教科等との往還した指導は有効であるといえる。これは、学級活動(3)を中心に、見通すことで目標の達成に向けて粘り強く取り組んだり、振り返ることで自己の取組の改善を図ったりする等の過程の繰り返しにより、学ぶ意義を理解し、日常生活をよりよくしていこうとする態度を養うことにつながったと推察する。

(3) 児童の記述をもとに対話的にかかわる指導は有効である。

VII-2-(3)より、教師による対話的【資料16】児童の発達の段階の把握

なかかわりについては、教員が児童の変容を見落としがちになる何気ない場面ではあるが、【資料16】のように、前回の児童や教員の記述と、今回の児童の記述を比較したことで、児童の発達の段階を把握することが可能となった。

また、【資料17】は、児童の記述に対して対話的にかかわり、児童の実践意欲を持続させていた学級担任のキャリア・パスポートを活用した感想である。



【資料17】事後アンケートにおける教師の自由記述

キャリア・パスポートの授業をきっかけに、子どもたちが生活カードの中に、次はこんなことをがんばりたいという内容を書くことが増えた。また、自然に振り返りをしている子どもの姿が見られた。教師が、キャリア・パスポートを活用することで、児童の実践に対して意識して声かけをすることが増えた。

【資料16】、【資料17】から、教師が、キャリア・パスポートを活用し、児童の発達の段階を把握した上で、記述による支援を行っていることが、児童の実践意欲の向上につながっていると考え、児童の記述をもとに対話的にかかわる指導は有効であるといえる。

Ⅸ 研究のまとめ

- 宮崎県版「キャリア・パスポート」(小学校版)は、継続的に利用することで自己実現につなぐ(基礎的・汎用的能力を高める)ものとなる。
- キャリア・パスポートは、学級活動(3)を中心に各教科等との往還を行う指導及び対話的にかかわる指導を行うことが重要である。

参考・引用文献等

「小学校学習指導要領」	(平成29年3月 文部科学省)
「小学校学習指導要領解説特別活動編」	(平成29年7月 文部科学省)
「小学校キャリア教育の手引き」	(平成23年11月 文部科学省)
「みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編」	(平成30年文部科学省・国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター)
中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」	(平成28年12月)
「宮崎県教育振興基本計画」	(令和元年 宮崎県教育委員会)
「雇用人財育成・確保対策特別委員会資料」	(平成30年 宮崎県)

《実践協力校 宮崎市立宮崎小学校》